





○初らぬとて結ぶとて

新 十八 人あはらばおりよらちまひてま〜よ〜了も い

新 十八 まよひこ〜美路のやを渡知もさざりつ了も よその

六 ね ちく縁ぞとむさ〜世といへむか〜色ぬうや了も を業結ゆあ

新 十八 定無 か〜了も わ結大世結殺のき路 うつらふまきしやひもあ〜

大和 知候 こよひ 了も さう結何りぬるもさ さきてう〜と悪ひき〜や

保氏 若ま登 なる 了も ハ思ゆる何れ え〜人のゆくへにあふや宿結ま〜あ

○つひうきとて結ぶとて

今七 こひ志をであらづ〜にやまを〜れむ了も いき結まつあ

新 十八 くれをが〜結集を〜ふま〜つひをよ 了も かくてもや万河のみづ

後 十七 なるもづきらふ 了も み川の浦がふこまやあめよ渡〜と〜了も

後 十八 なるもづきらふ 了も 人老をさ〜か〜了も へん〜了も

今七 色えんとたのむ色 了も ら色をさ〜何や〜やい〜了も

新 十八 色えんとたのむ色 了も ちか〜了も か〜了も 月ふあやま〜ん

○あそととらひる核

新 十八 けのあ結ふふしおもを〜し〜了も あな〜ん〜了も

後 十一 けのあ結ふふしおもを〜し〜了も あな〜ん〜了も

新 十七 けのあ結ふふしおもを〜し〜了も あな〜ん〜了も

大和 加〜了も か〜了も な乃美の〜了も

（あ結を五）  
十七又新いへむ〜  
十七又新いへむ〜

百十 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら  
このもさすうらやも

百十 *Shikimoku* 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら  
かくさうらやもさすうらやも

○十 二つあひま

十 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

十 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

十 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

○あそを

十 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

十 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

かくのぶくへをを帰らしてつふねなり。をふんま

○りしを りしをハリ末をひしをかりしにやぶしきの辞とつひのしを

ぞよりぞよのちぢ光のし。三のちぢの  
紙のりぢの條とかぢがへあしをぢ

二 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

四 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

三 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

十 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

三 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

十 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

十 花も春一人花も春ぬ葉の片もさすうふまはるうらやも。こまうら

又曰ト一とをいへばやがむしはれまき

後九

人のうへ乃あきくしいるがあうなるをいふも意はらざるなり りくそあれ

後一

身にうへてはややく花を惜むる那にいまは後の意 りくそあれ

後二

ふざや花をよりほり乃さきもかき花ちりぬやと人 りくそあへ

後三

あひあき人 りくそあき けがらきあきくつともあれをいふをやくてん

又よを常たしもの上りしもの海に

右十三

うつくおもさき しそ あく先 いそ 美あき人めきりしとるがわくは

右二

きうけききかん しそ あひ けがらきあきくつともあれをやくてん

右十一

あがこけき しそ 人ま いそ けがらきあきくつともあれをやくてん

右九

月あき しそ けがらきあきくつともあれをやくてん

大和

かき しそ あき けがらきあきくつともあれをやくてん

右九

あき しそ あき けがらきあきくつともあれをやくてん

こま しそ あき けがらきあきくつともあれをやくてん

右九

あき しそ あき けがらきあきくつともあれをやくてん

あき しそ あき けがらきあきくつともあれをやくてん

あき しそ あき けがらきあきくつともあれをやくてん

あき しそ あき けがらきあきくつともあれをやくてん

後十一

あき しそ あき けがらきあきくつともあれをやくてん

後十三

あき しそ あき けがらきあきくつともあれをやくてん

千三 何とてきかぬ又もやあつとまゝにわづらひては **まゝ** 祈りては

族 十 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

あがくへく又りかまの西の結よきし **まゝ** 祈りては

ものきりてはま川よの西の結よきし **まゝ** 祈りては

わらまはまはまに **まゝ** 祈りては

かゝるにまはま **まゝ** 祈りては

ちりぐくふ **まゝ** 祈りては

は **まゝ** 祈りては

○ **まゝ** 祈りては

もに **まゝ** 祈りては

祈 **まゝ** 祈りては

十 三 何とてきかぬ又もやあつとまゝにわづらひては **まゝ** 祈りては

あがくへく又りかまの西の結よきし **まゝ** 祈りては

ものきりてはま川よの西の結よきし **まゝ** 祈りては

わらまはまはまに **まゝ** 祈りては

かゝるにまはま **まゝ** 祈りては

ちりぐくふ **まゝ** 祈りては

は **まゝ** 祈りては

○ **まゝ** 祈りては

もに **まゝ** 祈りては

祈 **まゝ** 祈りては

十 三 何とてきかぬ又もやあつとまゝにわづらひては **まゝ** 祈りては

あがくへく又りかまの西の結よきし **まゝ** 祈りては

ものきりてはま川よの西の結よきし **まゝ** 祈りては

わらまはまはまに **まゝ** 祈りては

かゝるにまはま **まゝ** 祈りては

○まを

○五



後文

うねふーハ アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

件のちがごのこもアモトモハ アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

全七

まきー アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

後九

まきー アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

月十六

まきー アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

全八

まきー アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

月二十

まきー アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

全九

まきー アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

月十八

まきー アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

らふらふ上のさーその中けいふとんねと格と同一まきー アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

そのわけあざとく。こまあざとくへてんねへー。

○あつと法が格

け志といもゆるさまけ志まで下ふかの係 アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

かまけ アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

後九

け志といもゆるさまけ志まで下ふかの係 アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

後七

け志といもゆるさまけ志まで下ふかの係 アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

全三

け志といもゆるさまけ志まで下ふかの係 アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

七

け志といもゆるさまけ志まで下ふかの係 アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

後二

け志といもゆるさまけ志まで下ふかの係 アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

月十六

け志といもゆるさまけ志まで下ふかの係 アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

月十九

け志といもゆるさまけ志まで下ふかの係 アモトモ けくを祿りたつしけふえ竹をかきーかききや

○あはを入

〇七











む。大く口より下へ及びざる。程を先に程との格あり。たよるるをがぬ。

○定まぬ格より切まらぬ格をつらう。

後三 おかしくぞあつりしん。と。おひんぞさあゆらばやまのどぞと。

全二 いまひいさづきやんま。都一まま川あまのなき。と。おひんを

右一 吉やさき花やおきき。と。まうとひんうぐいともふもなれも有うか

同二 ひと見えしとまやう。と。さううまらちまちてあはるはん

同八 えぞしらぬやうらえよ今うはばあやすす人。やととぬ。と。

同九 しがぶく、あをたれらん人かあさしとやう。と。よきとらん

同七 かつらやまのまよりて見てゆめんさ。へやうあかいやあゆ。と。

後六 秋のせうりかくおあをさ見え。と。あやまら。と。おとらうれつ

右三 一しり乃山母りぎとをりもへてもさうまき。と。福をのぞき

同十七 位より結きしのおめあ人形くばいよりへ。と。おまきし物を

同十九 身はとてつらうをぶとちあうらつひまいり。と。あそぶく

後三 さとあしを危きと見え。と。ま川人のあぬおゆあすきまう那

おのしあひ。上りぞのや何ととひし。あつたあまの結び辞。と。切  
とらあ。あてつ。と。おとつ下の。と。おま准へて。

○定まぬ結び辞の格をうかへてあ。

後十一 みめあうら。と。あまにあ。と。まうたまをさへやあはらうぐあぬ

後十六 おひねあ。と。あまにあ。と。あまにあ。と。あまにあ。と。あまにあ。

後十七 けしあ。と。あまにあ。と。あまにあ。と。あまにあ。と。あまにあ。

後十八 あへぬねとけしあ。と。あまにあ。と。あまにあ。と。あまにあ。と。あまにあ。



廿三 ちふゆきと ねりひもいとぬゆきをふまぢり物さし宿乃月

ちのさびぐは梅ぞもいづとも上のておまをのさくのひこの下  
へも及ぶぞ

○上のておまはのさくのひ乃と下まで及ぶ梅

廿六 ちふゆきを本毎り花ぞ咲ふらういづとを梅とてきまほ

廿七 ちふゆきよと ちふゆきんちふゆきのと川せとあくぬり物を

廿八 いづくしてたづみきんむづづわきハむづづちあうなくに

廿九 みづは系えたて梅もいづと川いつえきとてりあかあうん

三十 ちふゆきぬふも梅どけり川とてりあかのとちふゆきに雪の降ん

三十一 きのおきてあらしむむかり残珠衣いくよへぬとが袖はむづづん

けもぐひ猶いとたぢり

○とにににににに

廿三 ちふゆきと ちふゆきをわらうと やあうふゆきさす

廿四 ちふゆきと ちふゆきをわらうと ちふゆきをさす

廿五 ちふゆきと ちふゆきをわらうと ちふゆきをさす

廿六 ちふゆきと ちふゆきをわらうと ちふゆきをさす

廿七 ちふゆきと ちふゆきをわらうと ちふゆきをさす

廿八 ちふゆきと ちふゆきをわらうと ちふゆきをさす

廿九 ちふゆきと ちふゆきをわらうと ちふゆきをさす

月八 ねあひり と ころの月日とちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

○ と と ころの月日とちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

全七 たちあがりまきり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

抄十三 くのちびび人さま と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

日記 と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後 と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

日 と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

○ と と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後十五 あー引乃ひり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後十六 あー引乃ひり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後十七 たくひ乃ちき と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後十八 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後十九 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十一 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十二 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十三 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十四 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十五 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十六 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十七 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十八 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後二十九 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

後三十 ちりぬきふけり と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

○ と と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり

○ と と ちりぬきふけりてさくらみくらぬきり







あゝあゝとをまきハ今かまをまき流くはれとま上のとのぬふおせり。さそ帰るか  
とにまあうどとあうどいづあしと

右十二 祢ふあきてむぢあまうども喜ぬりぬきわー神ととつてこへん

右十三 人物もを里をいりしてあまうどもはうけみやとこもいれぬあうり

右十四 身ふちかくきふらう酒をぬうりる秋をばよせふふりひ志りども

右十五 つひりゆくさともかめてきあうどもきのうらふとあはざりしを

右十六 むさー世は神むづむうり日きあうどもけいさたはぬみびま

右十七 くらわ山花をまけしそ久ー夕絶を結みやふ年ハを志りど

けあうハそのけびの志と一つあり。さそあうどとあうどハあうをとお射す  
辞あり。

けあのだととあうとあうりもねー

**を**

○流ねのをハあゝあゝとあうりなうりハあま

○やとあ辞ふあしを

右十三 人たりのくれえあきぬけさーくれを考といまもまていをいん

右十九 神ぬまて日かきハはとちかうらうとゆくとあひそきうらとを見ん

右十 けふかきれうふふゆのせハまづりーゆきまきけてけんを忘れ

右十九 とうけしはあがまのうらうといのこつたカ送け乃あうを見よ

右三 五月あけ月のふのふらあうあまほそきまどふさやふをあま







○一のふ

ふ まゝ秋乃くさへのあふむらうり尾花が風ふ 彦秋月影

月々 万葉集の巻をみよふ 奥秋勢かきおはつこのあさきの秋

月十 うねーきふうねもそひらるなるひうままたえー育ふ 今のあゆ

各うにこせとてかきて二つうをいひうら問ふをさうのふり。やーきう  
やあふおし。又似うををう。凡雅又後系極を扱おくとさうさあけし本  
るよりあふう月ふささううね。けふらひをさか。月又兼のさき  
いつまで。月と兼とをささううう入をささうハううねばさう。

○二のふ

風 一 けうくむまじやうふたさうりりてささふ子事の夏ふ かげん

新後拾 秋ふ 見ーあまあひもせきささうおねのこらるる巻のあさ菊

けふらひのふりけふいヤーくせ。秋見ーさどハ。返き母ハけふの乃  
うにありおま。古きあまハ見しうらうら。こまハ秋見ーといふささう

あふささうハりだうだ。やむとえどバ秋見ーとをいふ。オ子心秋まら  
あふうをささうよけきささうハ。あふささうのささうあうらうら。あふささう

○あふせんふ 四の巻何の終りかきさ

○かふ 四の巻かのかよかせん。

て

○はのていあおつてさ

○てきてーてむてよてんできんてきーてかあてきさ

そのもぐひのてい法の転用。けうら云の巻つづの終りあく  
つふを考ゆべー。てきうとつふあまきを隔りてよむハかか。あふささう

○あはま

○五二





右 今さらけにうぶき人とおもひしどはまむぐらうを門せりてへ

右 七 むうしよをなまきやどのまは茶を此の本にこそあそぶてへ

右 八 糸のまやみりうてへむ言砂の毛上ふたてるねもみりり

六 佑 ちひてへむあうぬまふとけうねくふあやしくまごふさかろうね

こけふはとくをつめててへといつてしつあをほごまきてあといふそん  
ねぞし。まそこまてのゆふ入べき様はねまたまびくくてりたよりそこふ

○てむ 三のまごのゆりせり

○てよ 五のまよのゆふまきり

○あどて 四の巻何のゆふせり

で 濁

○でハむしそのはぐまりしる様じつのでらあうしあ

○あで けあはんなどねあといつて。まの情どたらうり

右 十三 んるまかろわがまをううううねばやう あで 海吉の是くあう

後 十六 かひもなまきまねけりてう、あのみあきま あで 房あうん

後 八 うねよふをゆきかろ あで うきうりゆまひ乃わふとあう

新 六 中々にまま あで うづま火のいきそくひまきまふと有う那

日 八 おり人思りまうらぐりにま あで 立あうとくまけりすまを

日 十 八 けうかうがま あで そへてハなごうま州んあま

日 十 八 つきとせぬむうりたま あで たいてうまかまのこま







万八 春けつりしをみよはるゝあり我ぞゆきをまつり 一 萩絲 二

万九 天の川せがれあはれはるゝききどなたは 三 見きぬ 四 山 五 月 六

万十 さか心のちのせのお茶ちうなべ 七 とうさへ 八 又 九 とう 十 月 十一

万十一 かまぐにせひたれももまひ 十二 身を 十三 志 十四 ぬ 十五 ぬ 十六 ぬ 十七 ぬ 十八 ぬ 十九 ぬ 二十 ぬ

万十二 ゆきかへり 二十一 の 二十二 ち 二十三 の 二十四 ち 二十五 の 二十六 ち 二十七 の 二十八 ち 二十九 の 三十 の

万十三 めあふり 三十一 ぬ 三十二 ぬ 三十三 ぬ 三十四 ぬ 三十五 ぬ 三十六 ぬ 三十七 ぬ 三十八 ぬ 三十九 ぬ 四十 ぬ

万十四 藤むぬ 四十一 ま 四十二 ぬ 四十三 ぬ 四十四 ぬ 四十五 ぬ 四十六 ぬ 四十七 ぬ 四十八 ぬ 四十九 ぬ 五十 ぬ

万十五 秋の月 五十一 ぬ 五十二 ぬ 五十三 ぬ 五十四 ぬ 五十五 ぬ 五十六 ぬ 五十七 ぬ 五十八 ぬ 五十九 ぬ 六十 ぬ

万十六 心のか 六十一 風 六十二 ぬ 六十三 ぬ 六十四 ぬ 六十五 ぬ 六十六 ぬ 六十七 ぬ 六十八 ぬ 六十九 ぬ 七十 ぬ

万十七 たぐい 七十一 ぬ 七十二 ぬ 七十三 ぬ 七十四 ぬ 七十五 ぬ 七十六 ぬ 七十七 ぬ 七十八 ぬ 七十九 ぬ 八十 ぬ

けしきくして。後のちけ月ひさむとつうう吳ちるとあり。神のちれをかく  
とく。いせと。さり。と。をあげと。あじや。にむつり。

右 三 ぬ 一 神 二 ち 三 ち 四 つ 五 ち 六 ち 七 ち 八 ち 九 ち 十 ち 十一 ち 十二 ち 十三 ち 十四 ち 十五 ち 十六 ち 十七 ち 十八 ち 十九 ち 二十 ち 二十一 ち 二十二 ち 二十三 ち 二十四 ち 二十五 ち 二十六 ち 二十七 ち 二十八 ち 二十九 ち 三十 ち 三十一 ち 三十二 ち 三十三 ち 三十四 ち 三十五 ち 三十六 ち 三十七 ち 三十八 ち 三十九 ち 四十 ち 四十一 ち 四十二 ち 四十三 ち 四十四 ち 四十五 ち 四十六 ち 四十七 ち 四十八 ち 四十九 ち 五十 ち

○二つのみ

後 一 新枝ぐ 一 浦 二 吹 三 風 四 ち 五 浪 六 ち 七 波 八 ち 九 浪 十 ち 十一 波 十二 ち 十三 波 十四 ち 十五 波 十六 ち 十七 波 十八 ち 十九 波 二十 ち 二十一 波 二十二 ち 二十三 波 二十四 ち 二十五 波 二十六 ち 二十七 波 二十八 ち 二十九 波 三十 ち 三十一 波 三十二 ち 三十三 波 三十四 ち 三十五 波 三十六 ち 三十七 波 三十八 ち 三十九 波 四十 ち 四十一 波 四十二 ち 四十三 波 四十四 ち 四十五 波 四十六 ち 四十七 波 四十八 ち 四十九 波 五十 ち





新六 ながびとばとが山のふもとを走り—みやこの人よ何事ぞたえよ

狭衣 早死ぬのそとけりてとぬまたとつぎのゆよぬきもつこへよ

こころはよ二つまで。上よりハ呼ぶをよ。下よりハ作するよ。○玉葉十たきをき  
きとこ人こいてるがき—くおひ出よ。夕暮のえがくまあゆハおどこし

○てよ

古四 せきかくは玉の川系のもちきりりねをかぢらう—てよ

新十三 たの巻あうん—とさうり深ちぎりふてうたよの中はまふあ—てよ

任次 西次 彦星人に恋をまさうりぬあふはがをるごつる雲を今ハや絶てよ

新十一 いせ未 なるはびとみドかき芦のふ—のまもつとて此世をこ—てよこや

後新十六 いのこきんあとおまうそかぎりてよまてとをてかぬを替りて

新十 かくてのそよふ有ぬ乃月あうばきかく—てよ玉降る神

万十 何うもぎとあにちかくまきまきてよとまんはふあ—つてあやと

○こよ

新三 やよやまてふはそぎはあつせんそれ世に—いぬこよ

万九 とが妹が志のびりうせよと流る—紐いとにあるあまハとがど—こよ

新川 ちうくふふ海もあそむちをふらるとこ神よりまがられゆくりこよ

新八 あさま—やこハなふてはるあぞ—こよ 志せよとてまはれざりらるこ

新十五 さま—こよ 兄—西親もちぎり—も志せどあがうつ—あうねバ

新六 さま—こよ 兄—おも物—つ—うあうたため—もつじとあふ

○よま

新三 長月おれ日おとふはし葉乃花のうひあくかい—ら—こよ

○ふれを五

○五







右九 月のくもぬるはくくの朝香に 晴がらまゆく松を **志** ぞいあ

同十七 ちりやゆる宇治の橋をあれを **志** ぞありととあや年法へゆきぞ

万八 たちをなほ花ちる里法やとくきとかく志一つあく日 **志** ぞあふき

同十五 坊一ちを志をかりやいほへもあき志の〜一つ福の志 **志** ぞなく

右二十 あくしした年法ちどめふかく **志** ぞもみ年法あひしたのきまつを

同廿二 西院 あきやこの天法ねであく **志** ぞを志がみき〜たてまつり

右廿四 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

右廿六 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同廿八 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同三十 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同三十二 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同三十四 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同三十六 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同三十八 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同四十 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同四十二 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同四十四 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同四十六 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同四十八 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

同五十 くれよりハク〜ん〜法眼目をぞい川 **志** ぞとのまらほるべき

○おのれそ

○七目

右

目がくあふく結り **志** もつら形に虫のみまけバまづそがあき

同

結ゆも牙をふて **志** もふまへ人乃あつたふあふらん

同

あざりあま志がく先糸とまう **志** もわぬ物りだも有る

同

いくよ **志** もつらし糸牙をあそまかく **志** もわぬ物りだも有る

同

あち先ハかまとして **志** もうを玉結目が思髪をあでまやまきん

右

いま **志** もつらし糸牙をあそまかく **志** もわぬ物りだも有る

右

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

右

たそあねのあふせ **志** もつらし糸牙をあそまかく

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

右

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

同

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく

あやよ世中をめ辞の志りトの核 **志** もつらし糸牙をあそまかく







きく 附き さま

右十八 中はくきくふあまなかくら乃本葉にまじりゆきやまはし  
同十九 またあれじりあざはよきくかろやのみまそらどあきくも  
後三 さくくきりきくは衣の係りばるる月日のきくきくも  
本和 ながきくもたのきりくねよの中沢社りるきくのかくふききり  
あつ万葉まふひききくきくきくきくきくきくきくきくきく  
りききききききききききききききききききききききき  
又ききききききききききききききききききききききき  
ド辞はくくきききききききききききききききききききき

か

○かハ切きく辞の下に依るやどじり上ふぞのや何ぞの辞あ  
まは又も極の結び辞を切く下にとかくらや  
右十 たりやよりまされて玉沢はませやこそあんとくせんか  
後十六 ぶぐりし勢をまみきぬべくむみどぢりにやとまきか  
右十九 いちとがくあふははききつうかバ恨まがうにききもえか  
後初 十五 あがむきは月かききぬあまきこが此言はむとむむりぞか  
同 十六 ゆくばくせくはもあめさくまのけりらとバくりハかづきよか  
同十七 きくもとくへむさうね交経のあむりけやあやと人のとへか  
え補 十五 ねまのこりてかすばくあは花たりさうら乃あうんか



後拾  
十七

かりひよはあはれのつらぞきしなげきその紫ぶぶかあよ。か

同三

みちうみしつらぶらうらつらじ。か

同十六

せしそやあやいけん秋のよとまて。か

同十七

しゆきとまのあぞ。か

同十八

こえこ。か

いせ  
おれ

あーくばまてとんよ。か

大和  
おれ

らてききみよとまらと。か

元晡素に身休き若は物芳か何とてもあつらあくぞとまらきぬか。き  
ハ上又ぞとまきぬか。か

後拾  
十七

とへか。か

新八

とへか。か

かくのぶらうトへかをほとらう。又後拾中ぬえ物所の何子ハ。か

ゆまはりのが。えよか。か

て。か

どとれ中にと。か

おふ此あをむたあき中。きか。か

らんか。か

